

地域で診療を行う勇気：へき地、地域医療を、診療所ベースの PBRN を通して支える

山下大輔

オレゴン健康科学大学家庭医療学講座 地域医療振興協会寄附講座担当教授

地域、特にへき地においては自分の研修や経験を超える領域に向かい合うことが多くあります。そのような時に医療者が感じる不安を乗り越え地域のニーズにこたえてゆくことをカナダの医師 Wootton は“Clinical Courage；診療する勇気”と表現しました。診療する勇気は、医療資源や専門医へのアクセスが限られるへき地では、日常のことです。また地域の医療にかかわる医療者は災害（東北大震災，コロナ）などで未知の状況下で診療する勇気に対峙することもあります。Walter らの研究によると、この診療する勇気を支えるものとして、“地域への奉仕をする責任感”、“不確実性の受け入れ”、“地域を理解し、リソースの最大活用する能力”、“自己の限界の認識”、“患者さんにケアが必要な時に自分の中との葛藤を克服すること”、“同僚からのサポート”を挙げています。

地域医療振興協会とオレゴン健康科学大学家庭医療学科は2018年から、診療所をベースにした Practice Based Research Network (JADECOM-PBRN) を通してプライマリケア研究を共同して行っています。地域、へき地という最前線で研究を行うことにより、地域に特有な疑問を解決し、地域という複雑な現場での診療の現実的な介入方法を探ることを目的にしています。今まで、4人のフェローが色々なテーマで研究を行ってきました。チームで行う ACP、診療所の電子カルテと質改善、へき地医師に残っている医師の満足度、そして現在は地域病院、診療所でのチームの発達を促進するための計測ツールの開発を行っています。また次期フェローは、日本の地域診療所をベースにするナースプラクティショナーの役割について研究する準備を行っています。これらの研究は「診療の勇気」を支える鍵となるテーマを扱っています。チーム医療の発展、地域を理解するための電子カルテを含めた情報収集ツール、また新たなチームメンバーとして今後期待されるナースプラクティショナーとの協同などは、へき地勤務の医師の満足度調査でも明らかになった地域とつながりが強く、奉仕力の高い医療者の活力をさらに支え、次の世代を考える上でも重要なことだと思っています。これらの実例を紹介しながら今後の地域医療の未来、そしてそこでの診療の勇気を支えるアイディアを皆さんと考えてゆければと思っています。またこれを機会に PBRN という形で地域医療の前線から研究に参加していただけるきっかけになればと思っています。

【略歴】

- 2000年 信州大学医学部卒業
- 2000年 米国横須賀海軍病院インターン
- 2001年 武蔵野赤十字病院 初期臨床研修医
- 2003年 聖マリアンナ医科大学総合診療内科 医員
- 2005年 生協浮間診療所（日生協家庭医療学レジデンス東京）
- 2006年 オレゴン健康科学大学家庭医療学科 家庭医療学研修医
- 2009年 オレゴン健康科学大学家庭医療学科 リーダーシップフェロー
- 2012年 オレゴン健康科学大学家庭医療学科 ウォーターフロントクリニック所長
- 2012年 オレゴン健康科学大学家庭医療学科 家庭医療学副研修委員長
- 2018年 オレゴン健康科学大学家庭医療学科 外来診療統括部長
- 2019年 オレゴン健康科学大学家庭医療学科 准教授
- 2019年 オレゴン健康科学大学家庭医療学科 地域医療振興協会寄附講座担当教授

これからの地域医療と総合診療～2040 年に向けて準備すべきこと

長嶺由衣子

東京科学大学 公衆衛生学分野 非常勤講師 (元沖縄県立南部医療センター・こども医療センター附属栗国診療所 所長)

現在日本は急速な高齢化と人口減少に直面し、2040 年には団塊ジュニア世代が高齢期に入り、地域の医療・介護・福祉の需要がピークを迎えると予測されています。特に都市部・地方部を問わず、医療資源の偏在、医師の偏在、慢性的な人材不足が深刻化する中、地域の医療提供体制は持続可能性の岐路に立っています。こうした状況において鍵となるのが、「総合診療」の役割です。

総合診療は、疾患のみならず人を診る、そして生活・社会文脈を重視した包括的なケアを提供するアプローチと言えます。また、医療の中では診療範囲という意味でも、外来・在宅・入院・介護現場を横断し、多職種と連携しながら患者と家族の意思決定を支えるという意味でも、最も多機能であり、少ない手で多くの人を診るためには、こうした機能が、今後ますます重要になると考えています。

こうした背景の中、私たち地域医療に携わる人やその環境を整える人たちが 2040 年に向けて準備すべきこととして、本発表では次の3点に着目してお話をします。

1. 人材育成の再設計

地域志向を持ち、実践的に多職種と連携できる総合診療医の養成が急務です。教育現場では、医学生・研修医の早期段階から地域での経験を積む機会を整備し、「地域医療に軸足を置くキャリア」が魅力的に映る制度設計が必要です。

2. 地域包括ケアの進化

医療・介護の「連携」から「統合」へと発展させる必要があります。行政、住民、福祉、教育、企業などを含めた“地域共生社会”の中核に、総合診療医がコーディネーターの一人として関与する体制の構築が求められているのではないのでしょうか。

3. デジタルと地域医療の融合

医療・介護・福祉の資源が限られる中で、デジタル技術を適切に活用し、地域に根ざしたケアをどう最適化するか。医療職がその設計と実装に関わる力を持つことも重要と考えられます。

最後に、地域医療と親和性の高い総合診療の観点から考えると、2040 年を「危機」ではなく「変革の好機」と捉えることができると考えています。現場と制度の両面から地域医療を再設計するためには、今この時代に医療・介護・福祉に携わっている私たち一人ひとりが、地域で起きている目の前のことや、日本や世界で同じような課題に直面している人たちがどのようなアプローチをしているかについてアンテナを立てながら、しなやかに動いていくことが求められていると感じています。

【略歴】

一橋大学社会学部卒、長崎大学医学部医学科卒。

沖縄県立中部病院での初期、後期研修を経て沖縄県の離島にある医師一人、看護師一人、事務員一人の診療所にて離島医療に従事。地域医療の中で地域包括ケアを構築し、救急搬送数を減らすなどの取組を行う。その後、公衆衛生学、社会疫学の研究者として、全国の自治体とともに介護予防・健康長寿・健康の社会的決定要因に関わるデータを収集し、自治体の施策形成支援を行う。

現在は、厚生労働省老健局老人保健課にて、医療・介護 DX 等を担当している。

地域医療におけるサイエンス・クラフト・アート

花戸貴司

東近江市永源寺診療所 所長

コロナの流行とともに、我々医療者は、自らはもちろん患者さんや家族、そして地域の人にまで医学的な「正しさ」を求めた。それまでは、その人らしさや自己決定といった「価値観」を優先することを目指してきたはずであったのに。地域の中で大切にしてきたことと、何かが違うと感じていた。

医学の歴史を振り返ると、「健康」に影響する要因が外傷や感染症等の急性疾患や周産期管理が中心であった時代、医療の介入や公衆衛生活動が大きな役割を果たした。その後、慢性疾患の管理へ変化し、医療は生活指導という役割も担うようになった。そして今、かつては医療の対象ではなかった障がいや老い、認知症さらには貧困、孤独といった「状態」においても幅広く対応することを求められるようになってきている。その一方で、あらゆる事象を医療で介入することで、背景にある問題が見えにくくなり、人や地域が本来持っている自分たちで問題に対処していく力や自信が失われている場面も目の当たりにする。

健康とは？と問われれば「病気でない、弱っていないだけではなく、肉体的、精神的そして社会的にすべてが満たされた状態にあること」という WHO の定義が思い出されるが、近年、ポジティブヘルスと呼ばれる健康の概念も注目されている。それは健康の価値観を疾病の治癒や障がいの除去のみに目標を置くのではなく、様々な問題に直面しても主体的に対応し、自らの健康を維持・管理する能力。つまり、疾病や障がいの有無・大小に関わらず、生きがいを持って生活できる状態を健康と捉える考え方である。そのように考えた時、地域におけるケアでよくみられる医療・介護の専門職が中心となる integrated care (統合的ケア) と地域コミュニティのなかにあるインフォーマルな関係性のなかで互いに支え合う community-based care (コミュニティ基盤型ケア) を結びつけることが、地域の人々の暮らしを支えるうえで大きな存在価値があると感じる。では、地域で活動する医療者がそれらをどうつないでいくのか。制度や場づくり、ボランティアあるいは社会的処方など、さまざまなアイデアが浮かぶだろう。しかし、そのような場面にこそ、理論や技術ではなく、「感性」が重要になるのではないだろうか。

本シンポジウムでは、私自身の歩みを振り返りながら、地域活動における考えや行動の礎となったもの、そして地域での取り組みについて述べさせていただく。

【略歴】

1995 年自治医科大学医学部卒業

1997 年湖北総合病院小児科

2000 年永源寺町国保診療所（現・東近江市永源寺診療所）所長

【学会】

日本小児科学会認定専門医、日本プライマリ・ケア連合学会認定指導医、滋賀医大非常勤講師、三方よし研究会 実行委員長、医学博士、東近江医師会副会長

【受賞歴】

2015 年 11 月 京都新聞大賞 教育社会賞 受賞

2016 年 11 月 やぶ医者大賞 受賞

2017 年 11 月 糸賀一雄記念未来賞 受賞

2017 年 11 月 東近江市教育委員会 功労賞 受賞

2017 年 12 月 生協総研賞 特別賞 受賞

著書：「ご飯が食べられなくなったらどうしますか ～永源寺の地域まるごとケア～」、農山漁村文化協会「最期も笑顔で」、朝日新聞出版